

第四回 近松門左衛門戯曲賞 受賞

ほたる

螢の光

作／角すみひろみ

「登場人物」

勉

(井上勉)
いのうえ とむ

晴子

(井上晴子)
いのうえ はるこ

平田

(平田健介)
ひらた けんすけ

鈴子

(小阪鈴子)
こさか すずこ

林の妻

(林里美)
はやし りみ

尼崎。北の突き当たり。
市バスの終点の市営団地。老朽した棟が建ち並ぶ。
傍には、武庫川から水をひく、ドブのような水路。
21棟104号室。六畳間。
座卓の上にはチラシが数枚と、ラベルを剥がした水のペットボトルが1本。
壁に沿って、アームライトを取り付けたミシン台が置いてあり、
内職用ミシンが載っている。ベランダ窓に頭が向くようにして。
その隣の台には蛍袋の白い花の鉢植え。
花の台の下には、水のペットボトルが20本程置いてある。
ベランダには洗濯物。男物のみ。

■①勉と晴子

6月30日。日暮。

井上晴子がミシンを踏んでいる。晴子の鼻歌とミシンの音の中、
井上勉が帰宅して部屋に入る。
晴子の後姿は美しい。
勉、夕刊を座卓の上にポイと置く。

勉 電気ぐらいつけえや。

晴子 わ。

ハッと振り返る晴子。

晴子 お帰り。

勉 うん。目え悪するで。

勉、部屋の蛍光灯をつける。

晴子 どしたん？

勉 そんな驚かんでも。

晴子 珍しい。早いやん。

勉 珍しい定時や。

勉、背広を着替えながら答える。

晴子 なんで？ なんかあったん？

勉 あかんのか、なんかないと帰ったらあかんのか。

晴子 小学生レベルやな。

晴子、少し笑う。

勉 ハラ減った。メシ食わせ。

晴子 これ一着仕上げたら全部お終しまいやから。もすこし待ってて。

勉 待つってどんだけ。何分何秒。

晴子 20分。ううん、30分待つて。

勉 じゃあない。待つか。

晴子 じゃじゃあない。作るかあ。(立つ)

勉 嘘嘘、冗談。全然ええよ。いつも11時過ぎやしな。晩飯なんか。

晴子 こっちも嘘嘘、冗談。(ミシンを踏む)

勉 そうかー。

晴子 そうよー。

勉、着替え途中のまま、座卓の上の夕刊を広げて読む。

勉 「尼崎。国道171号線沿いのコンビニエンスストア」

晴子 ……ん？

勉 あっこちやうんか。これ。

晴子 中古車センターの隣の？

勉 うん。「女が現金を奪い逃走」やて。

晴子 嘘。

勉 つい今朝やで。「6月30日、午前10時40分」

晴子 ふうん。知らなかったわ。そんなん全然。(ミシンを踏む)

勉 逃走で。「金庫の現金30万2270円を脅し取り逃走」て。

そんなしみつたれた金で逃げなあかんなんて。空しいなあ。

晴子 (ミシンを踏む)…30万2270円。

勉 「女は30代前半で身長155から165センチ。

現金を奪って北の方へ逃げたとみられる」おお、モロにこっち方面やん。

晴子 ああ。そやねえ。ふうん。

勉、晴子の方へ向き直る。

勉 晴子。

晴子 ん？ 何。

勉 これ。

勉、封筒を手に入れている。

勉 30万2270円。

晴子 …へ？

勉 嘘嘘、冗談。夏のボーナスや。

勉、封筒を晴子に渡す。

晴子 わあ、ありがとう。

晴子、手のひらと手のひらで封筒を強く挟む。

晴子 上がった？ 下がった？

勉 んー、上がったり下がったりやな、人生は。

晴子 人生やのうて。

勉 ちよぼちよぼや。(部屋着を着ながら)

晴子 何イそれ。

勉 その封印を切ったら思い知るで。俺みたいな人間はちよぼちよぼや、いうて。

晴子 そんなことないよ。勉はご苦労さんやもん。いっつも。開けさしてもらうね。

勉 おう。

晴子、そろりそろりと封を開ける。

勉 なんや、儀式みたいな開け方やな。

晴子 (鼻歌) ♪いつくしみ深き 友なるイエスは 罪科憂つみとがいを 取り去りたもう
(讚美歌312番「いつくしみ深き」)

勉 なんやそれ。どっかで聞いたことある。帰って来たときも晴子、歌うたてたやろ。

晴子 …結婚式うとんとき歌た歌よ。

勉 …ああ。そうか。そやっけ。

晴子、封を開けた隙間から中身を覗き、また丁寧に封を閉じて、両手のひらで封筒を強く挟み、その手を鼻先へ。拝むような形。

勉 主よ、いつくしみ給え。

勉、茶化すように言った。

晴子 なあんも知らんのに。

勉 …ええ？

晴子 知らんのにね。キリスト教なんか。うちら。

勉 ああ、うん、まあ。けど一応祈っとく。アーメンソーメン冷やソーメン。

晴子 あ、ソーメン食べたいなア。

勉 晩御飯、ソーメンしてや。

晴子 うん。ええねえ。

勉 買ってこようか、ソーメン。

晴子 あるよソーメン。ちょうど先週生協で頼んどいた。そこの生協の箱箱ん中。

晴子、壁際に置いてある生協の箱を指す。

勉 今年初ソーメンやな。

晴子 あ、勉。

勉 ん？

晴子 やっぱりおつかい頼んでいい？

勉 うん。何。

晴子 新ショウガとー、

勉 ショウガ。

勉、座卓の上のスーパーのチラシの裏紙に、サインペンで大きくメモする。

晴子 ちよつとやから書かんでも。

勉 書いとかな忘れる。

晴子 3つだけよ。

勉 覚えられへん。スーパー行ったら、探してる間に忘れてまう。あとは？

晴子 あと、青ねぎとー。

勉 ねぎ。(書く)

晴子 ほんで、乾電池。

勉 電池。(書く) 何するん、電池。

晴子 蛍を見に行くん。

勉 蛍？

晴子 うん。懐中電灯下げて見に行くん。晩な、ソーメン食べたら連れてって。

勉 蛍なんかどこおんねん。

晴子 すぐそこよ。その水門あるでしょ。あっこから南へ、水路伝いに下って行くねん。

勉 水路いうてドブやんけ。あんなん。

勉、何か落書しながら話を聞く。

晴子 西武庫公園^{にしむこ}まで下る水路の道々にね、光るんやって。蛍。

勉 きれいとこにしかおらんのちゃうん。

晴子 きれいよ。あっこの水。

勉 尻^{ズマ}に蛍なんか。

晴子 汚ア見えるけど、ホンマはきれいんよ。

勉 ションベン川や、あんなとこ。

晴子 見てみたいもん、蛍の光。

勉 辛気臭^{しんきくそ}うて、嫌いや。あんなん俺。

晴子 勉、見たことあるん？

勉 ないけど。近いねんし。一人で行っておいで。

晴子 水路、暗いもん。一人じゃ怖い。一緒に。

勉 団地の奥さん友達誘って行き。

晴子 …友達おらん。

勉 おるやん、ぎょうさん。

晴子 おらんもん。

勉 他は？ 晴子。

晴子 …ええ？ 他って。

勉 他におつかいは？

晴子 …無い。そんだけ。他は何もいらんよ…。

勉 ん。

勉、ペンを置く。

勉 あ、お向かいの22棟の304。林さんと、帰って来た。

今四畳半の電気ついた。

ミシン台の晴子、ハッとその電気を見た。

勉、折り畳んだチラシをポケットに入れ、スーパーへ行こうと立ち上がるが、座卓の上のペットボトルの水を口飲みする。

晴子、何かの合図のように、ミシン台のアームライトを何度か点滅させて、灯す。
水を口飲みしながら、勉、その点滅を見た。

また、晴子のミシンを踏む音。

■②勉と平田

一週間後。7月7日。晴れた午後。

晴子はいない。

ベランダ窓の下に、空きペットボトルが並んでいる。

横一列にきれいに7本。少し異様。

蛍袋の鉢植えがある台の下には、まだ水が入ったペットボトルが十数本残っている。

勉と平田健介が座卓を挟んで座っている。

扇風機が回っている。

二人、カレーの弁当を食べている。

勉 もう決めたんです。

平田 まあそう言うなよ。

二人、食べながら。

勉 平田さん。

平田 はい。

勉 ホンマすいませんけど、

平田 すまん話は聞かんぞー。

勉 これ食ったら、帰って下さい。

平田 お前が出してくれたカレーみたいに言っなよ。

俺が持って来たったカレーやんけ。

勉 どっちのカレーでも、とにかく食ったら帰って下さいね。

平田 まあどっちのカレーか厳密に言っと、社長っちゅうか。

勉 社長？

平田 まあ実際は社長が、「井上になんぞうまいもん買って持って行っちゃれ」
言って金くれて、

勉、スプーンを置く。

平田 まあ食えよ。(食べながら)

勉 食えません。

平田 なんでや。社長とは関係ないんやろ？

お前がこの一週間何の連絡もなく出社せんかった理由は。

勉 はい。それは完璧僕の一身上の都合で。

平田 ほな単純に、このカレーは社長の好意やんけ。いわば差し入れやんけ。
やから食え。

勉 やからこそ、よう食わんのです。良くしてもらったら困るといっか…。

勉、カレーを見つめたまま動かない。

平田 さよか。ほなカツもらうぞ。

勉 ……食います。

平田 漬けもんは？

勉 ……漬けもんも食います。

平田 どっちやねん。

勉 ……すいません。

勉、カレーを食べる。

平田 ようわからん奴やのう。

勉 ……すいません。

平田 おい、いのぼう。

勉 ……何なんすか。

平田 辛からい。水。

勉 ああ、あんま冷えてないけど。

勉、花の台の下にある、水の入ったペットボトルを取る。

平田 なんやこれ。猫か。猫防止か。

勉 おいしい水です。妻が知り合いからもらたらしくて。

勉、平田に水を注いで出す。

平田 こっちもう空やんけ。(ベランダ窓の下) なんやこれ。

勉 並べてるんです。俺。どんくらい水飲むんかなって。

平田 ホンマようわからん奴やのう。

勉 俺は一日にちょうど一本、飲むことがわかりました。

平田 理解しがたい。1、2、3、4、5、6、7本。この一週間の分か。

勉 はい。あ、今日はイレギュラーですね。この1本分は。

平田 遭難した人が小石を並べて日にち数えるみたいなものか。

勉 ……いや、そんな深い意味ないですけど。

平田、コップの水を飲む。

平田 ほんでこれ、会社実際、辞めたんか？

勉 辞めました。

平田 辞めるんか。

勉 辞めます。

平田 え、どっちやいのぼう、辞めたんか辞めるんか。

勉 え、いや、辞めた。

平田 うわ、辞表出したんか。

勉 いえ、辞表は、出してません。

平田 え、え、ほな社長に言っただんか。

勉 言いました。昨日電話で。

平田 嘘。電話！？ で、通ったん？ 社長OK出したんか。

勉 通ったいうか、OKとは言われてないっすけど。

平田 ほなまだ辞めてはないんやな。

勉 いや、辞めました。

平田 待って待って、わからん。正味しよまどっちや。もういのぼう出社せんのか。

勉 しません。すいません。

平田 わ、すいませんでどういいうことや。後よろしくお願いしますーいいうことや。

勉 …いや、まあ、はい。

平田 出たー。なんでや。なんで辞めんねん。お前真面目に何年も働いてきたやん。

たった5人のショッポい広告会社で。

いのぼうアンドン俺で営業2人羽織でしのできたやん。

なんで突然辞めんねん。いや辞めてない、辞めんや、けど仮にもう辞めるとしよう。理由はな

んや？

勉 …それはだから、僕の一身上の、

平田 教えてくれや。一身上いいうて、なんや。

勉 …すいません。恥ずかしいて…よう言わんです。

間。

平田 おう、まあカレー食べよ。

勉 はい。

二人、カレーを食べる。

平田 ほなこうしよ。いのぼうはもう退社した人間として、友達として話してくれや。あ、もしや俺か？ 俺悪かったか。

勉 違うんです。平田さんとか違うんです。

平田 セーフ。俺セーフか。会社か。(株名神クリエイイト広告社の全体が嫌か。

勉 いえ。

平田 さては社長の奥さんやな。専務嫌やろ。

勉 ホンマ嫌とかちゃうんです。会社の問題じゃなくて。

平田 俺嫌や。正直専務嫌や。あの耳毛ババアいっぺん殺したる。内緒やぞ。

勉 はい。

平田 …ま、そんな耳毛も心配しとったで。この一週間。

勉 ……。

平田 「井上くん、どこぞで死んだるかもしれん」とか言い出すし。

「家見て来たり見て来たり」てしつこいし。自分行って、死体見つけて来いーいうねんなあ。

勉 すいません。死んでませんでした。

平田 わかっとるっちゆうねん。

平田、勉のカツを取って食べる。

勉 …平田さん。

平田 おう。(咀嚼しながら)

勉 友達っすよね。俺ら。

平田 え、友達はちゃうやろ、一応は会社の3年先輩いう、

勉 友達として話せて、さっき平田さん言った。

平田 おうおう、せや、友達やった。

勉 友達として、俺も内緒でお願いしますね。絶対言わんといて下さいよ。

平田 おう、言わん。(咀嚼しながら)

勉、胸の何かを押し流すように、水を飲んだ。

勉 一週間前。6月30日。ボーナス、もろた晩。

平田 うん。

勉 妻が、消えました。

長い間。

平田 消えた？

勉 消えたいうんか、わからん。おらんようになりました。

勉、折り畳んであったチラシを広げて見せる。

サインペンで大きく書かれたメモ。

勉 「新しうが。青ねぎ。電池」

平田 ダイイングメッセージやな。

勉 俺のメモです。

平田 なんやお前か。ややこしな。

ほんでこれ、うちで作ったチラシやないか。(表を見て)

勉 俺の取引先です。西長洲の樽井酒店さん。いらんチラシ、ここへ束ねてあるんです。大事な事をメモする用に。

平田、チラシの裏紙の1枚を手にする。

同じように、大きくサインペンで書かれてある。

平田 「晴子へ。明日弁当いらん」

勉 妻への伝言も書いとくんです。

平田 ふうん。

勉 これは、終わった分です。もう。

勉、ぐちゃっと丸めて握る。

平田 ……。

勉 で、問題の晩に書いたメモが、それです。

平田 「新しうが。青ねぎ。電池」

勉 晴子に、おつかい、いうて頼まれて。

平田 ほう。

勉 「晩ごはんソーメンな」とか普通にふたり話して、俺スーパー行きました。ほんで、この3つ買って帰ってきたら、晴子は消えてました。

勉、両手で握った紙を持て余し、弄んでいる。

勉 昆陽こやのスーパー行って帰るのに30分足らず。その間の出来事です。

平田 おい、これはなんやねん、この黒丸くろまる。

平田、別のチラシを手にしている。サインペンで1センチぐらいの黒い丸が、いくつも書いてある。

勉 蛍です。

平田 え、蛍？

勉 俺が書いた。

平田 ハナクソやる。

勉 蛍なんです。スーパー行く直前、晴子が蛍の話をしたんです。

ホンマ言うて俺、その話退屈で、暇つぶしにペンで丸を塗り潰してた。何とはなしに。ぐるぐる、ぐるぐる。

平田 黒い蛍やのう。

勉 晴子が、一緒に見に行こうて。俺、一人で行け言うてもうて。

けどそんなん全然普通の、ようある会話やないですか。

俺、なーんも気に留めんかったんです。

平田 うん。

勉 ホンマ言うてそんな時俺、蛍とかそんなんより、…ナイター見たかったんですよ。36チャンネル。阪神巨人。正直おつかいも嫌々でした。

6時から試合始まつてる。急がな、急がなって、俺の頭ん中最悪でナイターナイターナイター一色で。ほんで、スーパーから帰ったら、

勉、握り潰して丸まった紙のボールを、ミシン台の脇のゴミ箱にポーンと投げ入れた。そして、ミシン台の隣、蛍袋の鉢の下に挟まれたチラシをそっと引き抜いて、平田に見せる。

平田 ……あぁ。

チラシの裏にはサインペンで大きく、「行ってきます」と書いてある。

平田 アタア…。

勉 ……アタアですよ。やっぱ。

平田 罪なこと言うのう、晴子さんも。「行ってきます」「てどいへや。
勉 わからん。

平田 「蛍を見に行ってくださいか？」「どこぞ遠くへ行ってくださいか？
「“あの世へ逝く”の行ってきますか？」

勉 わからん。探しました。蛍がおる水路で事故とかちやうかとか、
悪い奴に連れ去られたんちやうかとか、団地の誰かの家とか実家とか。
いろいろ心当たり考えて考えて考えるんですけど、俺わからん。
消えたんです。忽然と。

勉、「行ってきます」のチラシを、

ミンシンの晴子がいつも座っていた椅子の上に被せるように置く。

平田 うーん。

勉 「行ってきます」てアイツ、外行くん好きやないんですよ。

晴子、内職してたんですわ。いつもそこへ座ってミンシン踏んでる。

犬の服縫う内職。晴子こっつ早いんです。日に何枚も犬の服縫います。

あの晩も、この赤い服縫いかけてて、

平田 「これ一着仕上げたら全部お終いやから。もう少し待ってて」「って俺に言つて、
仕上げがとるやんけ。完全に。

勉が手にしている犬の赤い服は、縫い上がっている。

勉 ああ。

平田 …お終いか。

勉 え、お終いて。なんの終いやねん。わからん。

平田 なあ、持ち物やら荷物やらに異変はないんか。

勉 服もなんも全部そのまんま。…けど、

平田 けど？

勉 …ボーナスと通帳だけ。忽然と。

平田 おいおいおいおい…いのぼう…

勉 はい。

平田 わかれよ！

勉 何を。

平田 決定的やん。…「消えた」ちやうやろ。…「逃げた」いうねん。この場合。
勉 手加減なしですね。平田さん。

平田 お前は、「逃げられた」いう「つちや」。

勉 直球ですね。平田さん。

平田 男と逃げたな、こら。

勉 平田さんそれ、デッドボールです。

平田 痛いか。

勉 かなり。衝撃きました。

平田 痛いわなそら。

勉 反則でしょ。何の予兆もなく、何の予告もなく。妻が退場で。

平田 そんなもんかもしれんぞ。女房に逃げられる時って。案外。

勉 いや、男の影はありえないです。晴子に限って。絶対。

平田 俺かてそう思ったかつたわ。

勉 え、え、思ったかつた？ 平田さん…？

平田 いや、な、どこの亭主もそない信じたいやろ、いうこつちや…。

勉 はい…。

間。

平田 冷めたな。もう。

勉 それは、妻の愛情が冷めたと。

平田 カレーじゃボケ。

勉 ああカレー。冷めましたね。

二人、ちよびちよびとカレーを食べる。

平田 あきらめろ。

勉 あきらめろて。

平田 女房は、去った。以上。

勉 以上で、わからんことだらけです。

平田 突き止めるんか。

勉 どこで何してるんか。たまらん。生きてるんか死んでるんか。

平田 そない言うなら、警察にでも搜索頼めば。

勉 警察か。：それもようしませんねえ。

平田 やろ。ようせんやろ。

勉 妻のことですしね。

平田 知らん男と暮らしての捜査結果を、警察官から知らされてみ。最悪や。

勉 犯罪とか心中とか、そっちのセンが浮かび上がる最悪もあるじゃないですか。

平田 まあ、そら笑えんな。

勉 笑えませんよね。どっちみち。

間。

勉 ねえ、平田さん。

平田 おう。

勉 先週、コンビ二強盗あったん知ってます？

平田 おう、171号線の。

勉 犯人捕まったんすかね。

平田 知らん。ちっこいちっこい記事やしな。

勉 まだこの近くおるんですかね。

平田 さあ。もうおらんやろ。

勉 いや、おるな。俺はおると見た。

平田 逃げるやろ。どっかできる限り遠くに。

勉 潜むでしょう。どっかに死に物狂いで潜む。意外と近所の女やったりして。

平田 ああ、どっちやろなあ。

勉 平田さん、事件経過なんか報道されないですよね。

平田 ないやろ。

勉 あー報道してほしくないなあ。

平田 なんで？

勉 ちようどあの晩なんですよ。

平田 え？

勉 いや、晴子。

平田 …は？

勉 「30代前半で身長155から165センチ」ドンゴシヤ。

平田 …で、何が言いたいねん。

勉 いや、絶対誓って、疑ってないんですけど。

平田 そらそやろ。

勉 テレビにね、晴子が映し出されて、警官に肩を抱かれて、この市営団地のどっか、

晴子が潜んでた空家のある棟の階段を、俯うつむいて下りてくるんです。

報道陣の一斉のフラッシュの、血祭りに上げられる中で、

晴子がチラッと振り返るんです。

「この家、21棟、104号室、このベランダの俺うちの方を振り返る。

晴子は俺を振り返るけれど、野次馬は誰もそんなん知らん。

早口のレポートが告げる。

「今、容疑者が逮捕されました。井上晴子、31歳、内職」

カレーを食べる平田、

平田 …アホぬかせ。

勉 晴子が犯人とかありえへんのに。そんなんばっかし想像してまう。

平田 寝言か。

人殺したわけちゃうし。ただか30万のハナクソ金がねで。んなもんあるかい。

勉 どっかでビビってる俺。怖いんです。怖いんですよ。得え体も知れん、怖いんです。

勉、水を一口、飲む。

平田 残酷やのう、お前は。ハナクソや。

勉 ……。

間。

平田 おい、いのぼう。

勉 はい。

平田 水、俺の水飲むなや。

勉 あ、すいません。

平田 そんなん言うてんと早はよ食えや。食ったら帰るいうてるやんけ。

勉 え…はい。すいません。

平田さんこそ、わざとゆっくり食ってません？

平田 食うてるか。ボケ。

勉 平田さん、次のアホ何時ですか。

平田 2時に、例の、西長洲にしながすの樽井酒店。

勉 完璧わざとや。サボリや。

平田 うるさい。営業の特権じゃ。

勉 もう1時半ですよ。はよ行かなやバいでしよう。

平田 ちゅうかお前の営業先やんけ。俺尻拭いやんけ！ あー、行きたないなー。

勉 平田さん、お願いしますね。

平田 あー行きたない。外出たら暑いしなー。どこにも行きたないなー。

上階からミシンの音。

平田 ……何の音や。

勉 ……上の奥さんが、息をしてる音。

平田 ……激しい息やのう。

勉 この団地の奥さんは、ぎょうさん、こんな息するんです。昔っから。

平田 壁が、震えとる。

平田、隣との薄い仕切り壁を見ている。

勉 晴子も、こんな息で喘あえいでました。そこへ座って。昼も夜も。

ミシンの音。

■③勉と鈴子

午後3時半頃。座卓の上は、カレーの弁当がらが散らかったままである。

勉、ベランダと部屋との境で電話をしている。

勉 そんなん遅すぎる。何とか今日来てもらえませんか。

えー、困るなあー。は？ いや、だから、

勉、乱射するかのようになり、リモコンの電源を押しまくる。

勉 リモコン押ししても動かないんで。全く。

え？ ええ、はーん、そのコンセント抜いたら全てがリセットされるんですか。それいいっすね。どこ？ 中のん？ え外、外ですか？

勉、ベランダの室外機と部屋とをのろのろと行ったり来たり。

並べているペットボトルが倒れないか気にしつつ。

勉 いや、うち室外機にそんなコンセントないみたいやけど、

というかね、蜂がね、わわわ、ちよ、すいません、蜂が、

勉、慌てて部屋の中に入り、網戸を閉める。

勉 おおセーフ。

あ、もしもし。すいません。いや蜂です。何故か家、ベランダに蜂がようけおって。嘘。蜂の巣ですか？ 室外機？ え、どうやって室外機の中に？

ええー、ちよっと見てみるんで、

勉、ベランダの蜂を警戒しながら、網戸を開けようとしたその時、

玄関の鉄扉が小さく何度かノックされる。

勉 あ。

勉、ノックに気が付くが、玄関へ出ず、ベランダにも出ずに、網戸越しに室外機を覗く。

勉 ああすいません、わ、ほんまですなえ。なんか、プロペラの網の隙間から蜂が、

両方が気になる勉。

また玄関の鉄扉が小さく何度かノックされる。

勉 ……あ、晴子。

勉、小さく呟いた。勉、電話に、

勉 あのですいません、急用なんで。今日来てくださいよ。絶対。待ちますんで。

勉、心ここにあらずで電話を切る。

思索するようにゆらゆらと玄関へ歩き、覗き窓から見る。

勉 ……え。

勉、鉄扉を開けずに聞く。

勉 はい。何ですか？

間。

鈴子の声 あーそーぼ。

鈴子、小さな声。

勉 ……誰。

鈴子の声 勉くん。

鈴子、鉄扉に張り付いて話す。

勉 はい。

鈴子の声 鈴すず。

勉 え。

鈴子の声 鈴子。小阪鈴子。

勉 え。

勉、鍵と鉄扉をそろりと開ける。

小阪鈴子立っている。カゴバッグひとつ下げて。

スカートに春ジャケットを着たような、季節感がちぐはぐでだぶついた、どこか垢抜けない格好。

鈴子、小さく頭を下げた。

沈黙。

鈴子 ……わかる？

勉 ……え。

鈴子 昔105に住んだ。

勉 え。隣の。

鈴子 そう、隣の。

勉 鈴ちゃん。

鈴子 ピース。

鈴子、ピースの二本の指を、勉のおでこへ。

勉 ……。

そのままの姿勢で鈴子、小さく笑う。

勉 いて。

鈴子 遅っ。

勉 いや、突然やから。

鈴子 うわあ変なの。オッサンの勉くんや。

鈴子、ケラケラと笑った。

勉 ……オッサン。

鈴子 勉くん、上がっていい。

勉 え…いいけど。

鈴子、パパッと靴を脱いで上がる。

鈴子 おばちゃん、おじやましまあーす。

鈴子、奥の台所に向かって叫ぶ。

勉 おらんでオカン。とっくに。もうここには。

鈴子 知ってる。

勉 ああ、そうなん。

鈴子 昔みたいにながってみたかってん。

「鈴ちゃん、おかえりー」やろ。あつこの台所から。

勉 ああ、オカン。やたら声デカいし。

鈴子 もう今、園田そのだにははるんやってね。おっちゃんとおばちゃん。

勉 ああ、うん。競馬場のすぐ南側。

鈴子 で一っかいマンション。徹兄ととおひちゃんは就職して埼玉かむすいの川越かわごえで、勉くんは、結婚して、そのままここへ住んで。やろ？

勉 うん。そう。よう知ってんな。

鈴子 いっぱいいっぱい知ってる。噂だけは。

勉 噂？

鈴子 そ。

勉 どんな情報網やねん。

鈴子 それは言えんな。秘密ルートや。

勉 秘密？

鈴子 そ。

鈴子、壁にくつつくように、ペタンと座る。

勉 あ、あつ、ごめん、

勉、慌てて座卓の上のカレーのゴミを掻き集めて台所へ。

鈴子、ケラケラと笑う。

勉 ごめんごめん、そこ、座って。(座卓を指して)

鈴子 いい。ここがいい。隣うちの家。

鈴子、壁一枚向こうの昔の自分の家を感じて座っている。

勉、鈴子に風が行くように扇風機を移動して、

勉 …どしたん。鈴ちゃん。突然。

鈴子 勉くんに会いに来てん。

勉 …俺？

鈴子 嘘嘘、冗談。

勉 やるな。

鈴子 これ昔の勉くんの真似。

勉くん ああ、結構今も言う。

鈴子 へー、そうなんや。

勉 で、なんで？ 今日ほ。

鈴子 なんてって、決まってるやん。実家帰って来てん。

勉 実家ないやん。

鈴子 嘘嘘、冗談。勉くん以外の人に急用。

勉 じゃ、そのついで？

鈴子 そ。勉くんは…オマケ。

勉 別にええけど。

鈴子 うち、この団地の中入るん、引っ越して以来やで。高校一年ぶり。

やから、10何年？

勉 16年？

鈴子 16年か、ごめん計算できんアホで。

勉 うん。よう知ってる。

鈴子 うわア、ひどオ。16年ぶりで会ったのに。

勉 そんな久しぶりな感じせんかもなあ。

鈴子 久しぶりな感じするよ。前世以来なぐらい。

勉 ようわからん。鈴ちゃんとは、前世で会^おうてへんからな。

鈴子 いややア、寂しい。なんでエ、うち今、きゅーっとしてんのに。

勉 え、きゅーっと？

鈴子 その階段上^はってきたから。

勉 階段？

鈴子 団地の階段上ると、なんか、きゅーっとなる。ならん？

勉 そのきゅーがわからん。

鈴子 うそやア、住んでた頃も毎日なってたもん。うち。その階段、昼でも薄暗くて、ねずみ色やん。

勉 うん。

鈴子 上の^{のほ}ごことに、セメントの奥の鉄骨の音するやん。

勉 うん。

鈴子 その音が、なんやアバラの底辺あたりにコツーンと響いて、

「ここが、しばまってしまつような、こそばゆいような。ならん？ 勉くん。

勉 全然わからん。生まれたときからここにおるけど、一度もなつたことない。

鈴子 ええー、そうなん？ うちだけ？

勉 鈴ちゃんだけやろ。

鈴子 …そつか。うちだけやったんかア、寂しいなア…。

沈黙。

勉 ああ、ごめん、なんか飲む？

鈴子 うん飲む。

勉、立とうとする。

鈴子 いいよ、その水ちようだい。

鈴子、座卓の上、カレーを食べていた時の残りのペットボトルの水を指す。

勉 ぬるいで。

鈴子 ぬるくてもいい。

勉、コップを持ってきて、ペットボトルの水を注ぐ。

勉 はい。(渡そつとして)

鈴子 もっと。

勉 ああ、うん。

鈴子 もっと。いっぱい。

勉 こんくらい？

鈴子 こぼれるぎりぎりまで。いっぱい。

勉、ゆっくりと、コップの一杯ちようどまで注ぐ。

勉 はい。ぎりぎり。

鈴子 サンキュー。

勉、座卓の上の並々のコップを鈴子の方へ手で押して差し出す。

鈴子 本当言うとノド乾いてた。声掛けてくれるのちょっと待ってた。

鈴子、こぼさないように、水面を見つめながら、ゆっくり持ち上げて、飲む。

鈴子 ぬるい。

勉 言うたやん。

鈴子 けどきゅーっと生き返る。勉くんは？

勉 今はいいや。

鈴子、勉に差し出そうとペットボトルにかけた手を戻し、

所在なげに、水を飲みながら、

鈴子 なア、勉くんってさあ、

勉 ん？ 何。

鈴子 今日休みなん？ 仕事。

勉 え、いや、ううん、…夜勤。

鈴子 夜勤あるんや。大変やなア。

勉 大変…っっちゃあ大変やけど、たいしたことないっっちゃあたいしたことないよ。

鈴子 営業してるって噂、聞いたけど。

勉 そう営業。おお、そんな噂まで。よう知ってるな鈴ちゃん。

鈴子 営業も夜勤あるんや。

勉 …イレギュラー的に？

鈴子 いややア、ごめん、夜勤やったら、今ってちょうど寝てる時間やった？

勉 いやええで、たまたま起きてたし。

鈴子 そう。良かった。奥さんは？

勉 …え。

鈴子 奥さん留守？

勉 うん、留守。

鈴子 買い物とか？

勉 うん、買い物。

鈴子 ほな待とうかな。

勉 待つ？

鈴子 困る？

勉 いや、困る…わけじゃないけど…待つって？

鈴子 言うたでしょ。勉くん以外の人に急用って。

勉 え、急用って、うちの奥さん？

鈴子 そ。奥さん。

勉 ああー、えっとねえ…。

鈴子 ^{はる}晴ちゃん。

勉 あ、そう、うん、晴子。鈴ちゃん知ってたんや。俺が晴子と結婚したって。

鈴子 知ってた。今年の2月ぐらいに知りたてやけど。

勉 これも秘密ルートからの情報？

鈴子 んー、んー、まあ、そかな。

勉 そのルート三流やな。情報遅いなあ。結婚したんはもう5、6年前やで。

鈴子 ホント、聞いてビックリしたア。うち。ショックやったア。

勉 なんでショック？

鈴子 だってふたり、同じ団地で育って、中3で付き合って、まさかそのままずっと続いて結婚するなんて思わなかったもん。あの頃。うち。

勉 俺自身が一番思わなかったわ。

鈴子 晴ちゃん家、あっこの、22棟の204やったやろ。(向かいの棟を指す)

勉 うん。

鈴子 晴ちゃん、お嫁さんに行くのに、向かいの棟へ移るだけやってんなー、近すぎるなー、とか思ったら、うち、ショックやった。正直。

勉 ……。

鈴子 何の景色が変わったんやろか。アッチとコッチ、そっくりな建物の、同じ景色をただ逆から見るだけやん。この先きつと子供が生まれて、その子供らもうちらみたくに団地で育って。もう団地スパイラルやん。団地輪廻やん。

鈴子、ミシン台の前に立ち、ベランダ窓から向かいの棟を見てカフッと云う。

勉 ……そりゃあ、シヨックやなあ。……手厳しいなあ。鈴ちゃんは。

間。

鈴子 あア、ごめん…。ごめんごめんごめんごめん。勉くん。

勉 そない謝らんでも。

鈴子 いつも言わんでいいこと言ってる。うち。

勉 同じこと思ってるし。俺も。

鈴子 そやの。相手も一番痛いところやってわかってんのに、ゼーンブ口から吐き出してしまつ。そやし、みんなから嫌われるねん、うち。

勉 うん。よう知ってる。昔っから。

鈴子 いややア。アカン。うち、腹がねじくれてもってる。ちゃうんよ、たまらんうらやましいんよ。ふたりのこと。ここで一緒に大人なって、ここで一緒に幸せで。

鈴子、またさっきの壁にくっついて、ペタンと座る。

勉 ……鈴ちゃんは？

鈴子 へ？

勉 鈴ちゃんは幸せとちゃうんか？

鈴子、壁にくっついて座ったままピース。

鈴子 余裕。

鈴子、ケラケラと笑う。

間。

勉 鈴ちゃん…。晴子に急用で、何？

鈴子 ちよつと。

勉 ちよつとというて、何？

鈴子 それは言えんな。ちよつとはちよつとや。

勉 その「ちよつと」はわりとでっかい「ちよつと」やったりする？

鈴子 何でそんなん聞くん。

勉 え、聞くやる。気になるもん。…晴子、急な用とか、今までそうないし。
鈴子 いややア、愛やね愛。

勉 愛てなんや。

鈴子 夫婦愛やん。妻の急用は俺の急用か。

勉 言うてる意味がわからんわ。

鈴子 じゃ、わかってもらわんでええ。

勉 何で噛み付いてくるん。俺に。

鈴子 例の「ちよっと」はあたしにとってはでっかくて、場合によっては、勉くんにとってもでっかいから、噛み付いた。

勉 ー…そうか。なんかややこしいなあ。

鈴子 そ。

鈴子 …言つとくけど、晴子、遅いで。

鈴子 買い物やったらじき帰ってくるでしょ？ 待つよ。

勉 …いや、ちよっと遠くまで買い物。

「この辺には売ってないものを、探しに行ったみたい。」

鈴子 ふうん。遠く。どこまで？

勉 それが、聞いてないねん。どこやる？

梅田か、心斎橋か、天王寺か、神戸か、京都か、そこらのどこか。

鈴子 範囲広っ。

勉 そやねん。アイツ、フェイント使いよる。行動範囲狭そうに見せかけて案外広いねん。

鈴子 …阪神尼は？ 範囲には入らへんの？

勉 近っ。なんで阪神尼？ 梅田や京都やと並んでなんで阪神尼？

鈴子 …うち、今住んでんのあのへんやから。

勉 そうなん。鈴ちゃんあっこらへんかー。

鈴子 三和商店街の近所なん。国道2号線渡った北ツ側。

勉 便利やな。三和近かったら。

鈴子 うん便利よう。「この辺に売ってないもの」、意外と置いてたりするで。

梅田にも心斎橋にも天王寺にも神戸にも京都にも、売ってないものが、あの商店街の奥の奥に、ホロツと売ってある。

勉 売ってそう。それもやっすい値段で。

鈴子 尼の買い物。プロの主婦やったら、あそこを探るよ。

勉 けど晴子、買い物下手っぴやからなー。

鈴子 勉くんを選ぶくらいやからなー。

勉 そう、下手っぴやから、結局買うもん探して迷って、帰ってくるの、「っつっつっつ遅おそなると思
うねん。

鈴子 ふうん……。遅なるんかア。困ったなア。

勉 もしかして、約束とかしてた？

鈴子 約束はしてた。一応。

勉 してたん?! そしたら、もしかしたら晴子、早はよ帰ってくるかもしれん!
約束を思い出して。

鈴子 ちやうよ、うちらがしてた約束は「いつか」っていう約束。

勉 いつか?

鈴子 もっと早くに早くにっつうち、思ってたけど。全然来れんで、勝手にうちが、
今日、来た。

勉 ……じゃあ今日待ってもらってもアカンなあ。どうする? 鈴ちゃん。

鈴子 困ったなア。都合が合わんねえ。晴ちゃん。

長い間。

鈴子 ……お願いがある。

勉 ン。何?

鈴子 ……うち、晴ちゃんに渡すもんがあつて来たんよ。渡すと言っか、大分前に借りてたもん、返す
んやけど…。

勉 うん。

鈴子 それ、勉くんに託すことにするよ。託すから、絶対渡してくれる?

勉 ……え。

鈴子 晴ちゃん帰ってきたら、絶対。

勉 ……え。俺? 俺、今晚夜勤やから、晴子と入れ違いやし。鈴ちゃん、また今度直接、渡しに
おいでや。

鈴子 うちなア、もう今日しか無理なんよ。

勉 なんで? 来週にでも、

鈴子 引越すから。今日。この後。ちよつと遠くへ。

勉 ちよつと遠くてどこ?

鈴子 どこって、それは…広島。

勉 ほな広島からいつか渡しにおいで。いつかの約束やったら、またいつかでええやろ。尼あまへ里帰
りしたときにでも持っつておいで。

鈴子　お願い。

鈴子、いきなり頭を床へ。そして、頭を下げたまま、

鈴子　…勉くん。渡して。

長い間。

勉　…うん。ええけど。

鈴子、頭を下げたまま、

鈴子　せんきゅー。

勉　…うん。

鈴子、頭を下げたまま、

鈴子　…勉くん、後ろ向いてて。

勉　は。

鈴子　クルッと後ろ向いて。

勉　うん。(嫌々)

勉、座ったまま、鈴子に背を向ける。

鈴子　そうして待ってて。託すもの、渡すから。

勉　…うん。

鈴子も、勉に背を向けて座る。

鈴子、音を立てないようにウエストからスカートの中に手を伸ばす。

下腹に横巻きに結びつけていた、ストッキングをほどく。

ストッキングの中には、薄いナイロンポーチが入っている。

ポーチのチャックを開け、中の封筒を出す。

ナイロンポーチにストッキングを入れ、ジャケットのポケットの中へしまう。

勉 ……何じゃこれ。

鈴子 ……まだよ。

勉 ……何しとんねん。俺。

鈴子、座卓の上のチラシの束から沢山チラシを取って、封筒を包装する。

分厚い包みが出来上がる。上部にサインペンで何か書く。

鈴子、包みを何で止めようか迷い、ミシンを見やる。

ミシン針に掛かっている、赤い糸を、カラカラと引っ張って取りながら、包装の上からゲルグルと幾重にも巻きつけて、玉止めする。

そして、勉の隣へ。

鈴子 ……。(渡す)

勉 うん。

鈴子 ……晴ちゃんに、このまま渡して。

勉 ……うん。

鈴子 ……絶対中、見んといてね。

勉 ……うん。

鈴子 ……恐ろしい虫が入ってるから。

勉 ……ええ？

勉、手にした包みを見ている。

鈴子 ……毒があって咬む^か。

勉 ……へえ。

鈴子 見んといてね。絶対よ。

勉 ……な、これ、何の絵？

鈴 鈴。

勉 絵、下手やな。

鈴子 けど、いい音で鳴るよ。その鈴。

鈴子、少し笑った。

勉、鈴の絵を見つめながら、たんすの引き出しを開け、奥に包みをしまう。

鈴子 託した。

沈黙。

鈴子 あ、そうや、しまったアー……！

勉 どしてん。

鈴子 いややア、残念！ 冷めてもうたアー……！！

勉くん、忘れてたア、うちな、お土産、

と鈴子のカゴバッグから、袋を取り出したその時、玄関のチャイムの音。

鈴子 ああ、

勉 誰かな。

勉、玄関へ行きかける。

鈴子、カゴバッグを抱いたまま固まる。

鈴子 待って！

勉 ん？

鈴子 晴ちゃんやるか……。

勉 いや、晴子は、晴子は……、

またチャイムの音。

鈴子、ビクンと立ち上がった。

勉 そや、空調屋ちゃうか。俺電話で頼んでて、（玄関へ）

鈴子 待って！ お願いつ！

勉 どしたん……。鈴ちゃん……。

鈴子 勉くん、あんなア……。あんなア……、

チャイムの音、複数。

震え上がる鈴子。

勉 ん……？

鈴子 おトイレ貸してッ！

言うが早いか鈴子、カゴバッグを抱いたままトイレへ。

トイレのドアと鍵の激しい音。

玄関の鉄扉をノックする音と共に、林里美の声。

勉 ……。

林の妻の声 井上さん。井上さん。22棟の林ですけど。

■④勉と林の妻

その少し後。午後4時過ぎ。

林の妻、持ってきた生協の箱を置き、その横に座っている。

勉、突っ立って、林の妻の挙動を見ている。

林の妻 この台の上へ全部出しますよ。箱はうちのなんで、持って帰りますので。

勉 すいません。あ、僕、出します。

林の妻 かまいませんよ。すぐなんで。

林の妻、座卓の上に中身の食材を出し始める。

何か別ことを考えながらのような感じで、とてもろい。

勉 ……あの、僕、ホント出しますよ？

林の妻 いいんです。

積み木のように神経質に食材を積み上げていきながら、

林の妻 井上さんの旦那さん。

勉 はい。

林の妻 生協のフルネーム、ご存知です？

勉 え？ え？

林の妻 生協。

勉 あーいや、僕は詳しくは。

林の妻 生活協同組合。

林の妻、手はのろのろと動かし、積み上げて続けている。

勉 ……え？ で？ それが？

林の妻 運命共同体と、似てますね。

勉 いや、似てますかね？

林の妻 似てますよ。

どんぐり共和国よりは、はるかに似てるじゃないですか。

勉 え？ どんぐり共和国？

林の妻 トトロやら売ってる店です。そんな名前なんです。

勉 へえ…はい。

林の妻 それよりかは似てるでしょ。現実的で。生活協同組合。運命共同体。ほら。

勉 そう言われると似てるかな。

食材は、不自然に高く塔のように積みあがっている。

林の妻 生協の班、ご一緒なんです。共同購入の班。私とこの22棟と、こちらの21棟。

勉 はあ、そうですか。

林の妻 ですから、あなたも、私も、運命共同体ですな。

勉 は？ 僕？ 僕と奥さんが？ そうですかね？

林の妻 そうですね。例えば、これを運命としましょうよ。

不自然に高めに積み上げられた食材を指す。

勉 ……はい。

林の妻 毎週、決まった曜日に、生協の配達トラックがやって来て、その班の運命は、一箇所にもとめて配達されるのです。

勉 はあ。

林の妻 班の組合員さん全員の運命が、どれもごっちゃに混ぜられて、一括で配達されるシステムなの

勉 ……「この運命は、トサッと。…一山ひとやまになって。
ああっ、

林の妻、せっかく積み上げた食材を崩して、山にしてみました。

林の妻 わかります？

勉 いや、わかりますけど…。

林の妻 私、話下手はなしへたなんです、わからん話してたら、手えあげてわかりませんって言うて下さいね。
(鈍く挙手して少し笑う)

勉 ええ、手を…はい…。

林の妻 同じ班の組合員さんはみんな、この一箇所の山にたかって、より分けるのです。自分とこの運命を。

林の妻、食材の山を、またのろのろと神経質に積み上げる。

林の妻 「この運命はうちのん」

「この運命はおたくのん」

「これはあそこの奥さんのん」

言うて奥さん同士、会合しながら、より分けます。ちょうど、こんなふうに。

勉 ええ、はい。

林の妻、生もの、冷凍、乾物の3種類の山に、几帳面に選別して、積み上げている。

林の妻 ……今日、おたくの奥さんは、誰にも連絡なく、運命を放棄されました。

勉 放棄で…そんな、違うんです、ちょっと今日は外出で、

林の妻 責めてるわけじゃないのですよ。

私、今日、当番なんです。いわば運命当番です。緊急の何かあったら、当番の者がこうして、おたくへ持ってあがるのは当然なのです。

勉 けど……すみません。

林の妻 あ、これ、分けといたんで。生もの、冷凍、乾物。ね。(指して)

生の運命なま、凍った運命、乾いた運命やったらちょっと怖いですね。

勉 ……ああ、はは、確かにちよと、ですねえ。

林の妻 このふたつ、早よ冷蔵庫入れてくださいね。(生ものと冷凍を指して)
勉 どうも。わざわざ。次からはちゃんと…言うときます。

林の妻 次…？

勉 え、ええ、次からちゃんと。

林の妻 次とかそんなの別にいいんですよ。次は、お互い様ですから。
だって、運命共同体よ。私も…あなたも。

林の妻、勉の手を取る。のろのろと。すがるように。

間。

勉 ……あの。

林の妻 井上さん。

勉 林さんの、奥さん…？

間。

林の妻 運命って…何^{なん}なんでしようか。

勉 え…。

林の妻 食べるもんとは…違うわよねえ。(食材を見て)

勉 僕に聞かれても…わかりません…。

林の妻 そうよねえ…。

勉 ごめんなさい…。

勉、林の妻に握られたまま、手をおろす。林の妻、のろのろと離れ、ミシン台に座る。

林の妻 ……奥さん、ご病気じゃなくて良かったです。

勉 ええ。今日だけ外へ。

林の妻 うちの家、真向かいの3階でしょう。おたくのこの部屋、よう見えるんです。

ベランダ越しに「ニ、奥さんがミシンしてはるや、」一番見える。

気になってたんです。この一週間、座ってはらへんから。

一体どうなされたんですか？

勉 どうって、それは…それは…、

林の妻　うちだけじゃなくて、そこら歩いてる人にもよう目に留まるんです。

　　「こ」階やし、…井上さんの奥さん、きれいから。

勉　何が言いたいんですか…。

林の妻　奥さん、美しいです。座ってはるところだけ一日中、後光射こうしやしたみたいに。

勉　どういう意味ですか…。

林の妻　井上さん。…奥さん、団地のみんなに呼ばれてるか、「ご存知ですか。

勉　何ですか…それ。

間。

林の妻　マリア様。

勉、凝固する。

林の妻　みな拝みます。団地の亭主たちは目を奪われて通ります。

勉、ゆらりと挙手する。

勉　…はい。(挙手)

勉、林の妻に、挙手し続ける。

林の妻　亭主ら心の中で思ってるんです。いっぺん拝ましてもらいたい。

勉　…わかりません。(挙手)

林の妻　マリア様は、それら全てを悟りながら、何も言わんと、黙って「こ」へ、座ってました。

沈黙。

勉　…わかりません。(挙手)

林の妻、ベランダ越しに向かいの棟を見て、

林の妻　あ、うちの息子、帰ってきた。

こっからうちの窓もよう見えるんやね。私、帰らな。

林の妻、持参した生協の箱を手にとって、立ち上がる。

■⑤ 鈴子と勉

その少し後。4時30分頃。

勉と鈴子、鈴子のカゴバッグを引っ張り合っている。

ふたり、殆ど言葉はなく、息は荒れている。

本気のような、ヘラヘラ笑うような、けれど、激しく引っ張り合いながら、

鈴子 何。

もう何。

何よう。

勉くん。

引き合って暫く。

鈴子のジャケットのポケットからポトンと、さっき封筒が入っていたポーチが落ちた。

鈴子 あ。

ひるむ鈴子。勉の力が勝り、ポーチもバッグも引き抜いて取った。

勉、転がるように部屋の奥へ。ポーチとカゴバッグを抱き締めながら、

勉 勝ったあ……。俺の勝ちやあ……。

勉、ヘラヘラ笑う。

鈴子 なんでエー……。

勉 なんでも……。。

鈴子 返して。

勉、カゴバッグを手に、脚を投げ出して座る。

勉 どこへ行くんな。鈴ちゃん。そんな、急に急いで。

鈴子 やから、広島よ。

勉 広島のごり行くんな。何市何町何丁目？

鈴子 小学生レベルや。

勉 はい嘘確定。まあ座り。

鈴子 広島市中区舟入本町。これでええん。丁目まで覚えてない。

勉 じゃあない。信じといたろかな。

鈴子 ほなそれ、ちょうだい。

鈴子、手を出す、勉、ポーチとバッグを渡さない。

落ち着きを失っている鈴子。

勉 広島市中区舟入本町やんな。俺が車で送ったる。

鈴子 そんなん困る。

勉 気にせんでええで。ホンマ言うてヒマやし。俺。

鈴子 夜勤や言うたやん。

勉 夜勤は嘘嘘冗談。やから鈴ちゃん、いっぺん落ち着いて、そこへ座り。な。

広島は、どこへも逃げへんよ。

鈴子、ハツとして勉の顔を見た。

勉、バッグとポーチを自分の尻の後ろに置く。

勉 …どしたん、鈴ちゃん？ なんかあったんか。俺に言うてみ。聞いちやるから。

鈴子 …勉くんこそ、どしたん。トイレでゼーンブ聞こえてたわ。

勉 けど、俺はどうもないで。

鈴子 …どうももないやん。

勉 どうもなくなかないかな。ほんじゃあどうもなくなない仲間やな。一緒やな。

一緒に、食べよ。座って、食べよ。せっかくお土産、買ってきてくれたんやろ。

勉、優しく言い、土産の袋を取り、座卓の上に置く。

鈴子 …冷めてもったし、もういらん。

勉 冷めても美味いんがトミヤ商店のたこ焼きやがな。

勉、袋の中を出し、緑の藁半紙を剥がす。

勉 当たりやろ？ トミヤ商店のんやろ、これ。自転車屋の隣。

島津くん家のクリーニングの向かい。

鈴子 ……ん。(頷く)

勉、たこ焼きの上のビニール紙をゆっくり指で剥がしながら、

勉 えらい遠いところまで買いに行ってくれたんやな。

バス停からもこっからも、だいぶ遠い。

鈴子 ……ん。

(動揺しながらも、2、3度頷く)

勉 鈴ちゃんティッシュ。その、ティッシュ取って。

立ったままの鈴子。

勉 早よ早よ。ベタベタ。

鈴子 ……。

鈴子、足元のティッシュを取り、

ゆっくりと勉の座る前まで行き、ポトンと落とす。

勉 せんきゅーせんきゅー。

勉、ティッシュで両指を拭く。

勉 ソースたつぷり。1玉25円。

鈴子 ……40円。値上がってた。

勉 ふたりじゃ食いきれんな。こりゃあ。

鈴子 ……晴ちゃんおると、思ってたから。

勉、楊枝で1玉刺して、口へ入れる。咀嚼する。間。

2玉刺して、立ったままの鈴子に、

勉 あーん。

鈴子 何イ。

勉、へらへら笑って鈴子に

勉 あーん。あーん。あーん。

鈴子 あー

鈴子、かがんで大きく口を開ける。

勉、へらへら笑いながら、鈴子が後ろに反り返るぐらい、

口の上の高くに楊枝を持っていく。

鈴子もへらへらと笑って大きく反り返る。

その時、勉が楊枝からたこ焼きを滑り落とした。

鈴子 や、

2玉のたこ焼きは鈴子の春ジャケットに落ち、
ソースがべつとりと付いた。

勉 あ。

鈴子 いややア……………!

勉 ごめん。

鈴子、必死にティッシュで拭き取るがソース染みは広がる。
勉、手を貸そうとせず、見ている。

勉 ごめん。

鈴子 最悪……………!!

洗面所貸して!

鈴子、洗面所へ走る。

水道の流れる音。

部屋に一人残った勉、落ちたたこ焼きを暫く見つめるが、

そのまま拾いはせず、水道の音が流れていることに気を配りながら、そっとポーチを開ける。

パンストを出して見るが、ポーチを閉め、カゴバッグの中にポイと入れる。

そして、そっと、たんすの引き出しを開ける。

奥からさっきの包みを取り出す。

ミシンの上の、晴子の糸切り鋏ばさみを取る。たんすの、開けた引き出しの上で、包みのぐるぐる巻きの赤い糸を全部切っていく。

そして、そっと包みをほどこぎ、中の封筒を見てしまう。

札が入っている。札を数える。聞こえないぐらいの小さな声で。

勉

1、2、3、4、5、6、7、8、9

10、11、12、13、14、15、

16、17、18、19、20、21、22、23、24、25、26、27、28、29、3

0……。

勉の背後、部屋の入り口に、濡れたジャケットを手にした鈴子がノースリーブ姿で立っている。勉は気付いていない。

鈴子 ……。

水道はまだ流れている。

勉、札を封筒にしまい、またチラシでを包んで、そっとたんすの引き出しをしめて完了し、

鋏ばさみを返そうとゆっくり振り返ると、

そこに、鈴子がいた。

沈黙。

水道の音だけがする。

勉

…金持っちなあ。…鈴ちゃん。

鈴子

…勉くん…。

沈黙。

勉 ……鈴ちゃんやったんか。あれは…。

鈴子 ……あーあ。なんで見たん…。

勉 ……鶴の恩返しか。

鈴子 ……嘘つきは泥棒やで。

勉 ……逆や。泥棒は嘘つきなんやろ。

鈴子 ……嘘つきは地獄へ墮ちるよ。

勉 ……泥棒も地獄やろ。どっちみち地獄や。

鈴子 ……ほなうち、もう行くわー。地獄へ。

濡れたジャケットを手にしたままの鈴子、しゃがんで、バッグを手に取る。

勉、弾き出されたように、鈴子の背後から抱いて止める。

鈴子、身を固くして座る。

勉はバッグとジャケットもろとも鈴子を抱いて止めている。

そうしたままで二人、ただ座り込んでいる。長い沈黙。

鈴子、床に転がったままの2つのたこ焼きを見ている。

鈴子 たこ焼き。

勉 ん。

鈴子 わざとやろ。

勉 おってほしいやん。

鈴子 最低やア。

勉 うん。おってや。

鈴子 行かれへんやん。これじゃあ。

勉 うん。

鈴子 水止めてこな。離して。

勉 止めでええよ。離れたら行ってまうんやろ。

鈴子 中身は恐ろしい虫や言っただのに。

勉 ああ。

鈴子 勉くん、咬かまれてるでエ。今。

勉 どこを。

鈴子 お尻。

勉 嘘。

鈴子 知らんでエ。じき毒が回って、尻に火がつくわ。

勉 それ蚩か？

鈴子 なんやそれ。そんなきれいもんとちゃう。

勉 そか…。

鈴子 一つ約束破られたから、一つ約束破ろかな。

勉 何。恐ろしいなあ。

鈴子 晴ちゃんに。ピッタリ会ったんよ。今年、2月の初め。昼間に。阪神尼で。

勉 阪神尼で、何してた、晴子。

鈴子 天ぶら買うてた。

勉 天ぶら？

鈴子 三和商店街にね、ちっこい出店あるの。安うて揚げたて。

うち、子供抱いて、並んでたん。

勉 子供おるんや。鈴ちゃん。

鈴子 おるよ。2歳半。男の子。竜之介って言うの。めーっっちゃかわいい。

勉 やろな。

鈴子 竜之介を抱いてうち、ジャコ天揚がるの待っててん。そしたら後ろに人が並んで、「僕、男前やねエ」って、竜之介に言わはった。

振り返ったら、晴ちゃんやった。晴ちゃんと…男の人やった。

勉 男の人…？

鈴子 知らん男の人。

勉 ……。

鈴子 天ぶら買うて、男の人と晴ちゃんはその場で別れて、晴ちゃんとうちと竜之介で、喫茶店入ってん。コーヒー一杯やのに晴ちゃん、千年喋ってへん人みたいによく喋った。勉くんと結婚したことやら、勉くんが何してるやら、
どこの誰がどうなったやら。

勉 秘密ルートって晴子か。

鈴子 当リイ。そうでしたア。ほんでねエ、鈴ちゃんはどない？て聞かれた。話せるよ
うなことないし、うち「今、免許取りたい」言うてん。

勉 免許て車の？

鈴子 うん。竜之介、もう2歳半やのにまだつかまり立ちしかできへんの。

うち、アチコチ大変やから車乗りたいけど、余裕なくて取れずじまいや、「晴ちゃん貸してエ」
って、冗談言うた。冗談やったんよ。ホント。

勉 うん。

鈴子 喫茶店出てバス停まで、国道2号線を歩いてたら、晴ちゃんが「ちょっと待ってて」言うた。

ほんで、帰ってきた晴ちゃん、銀行の封筒そのまんま、

ポンと竜之介に渡したん。免許代。30万。「いつかでいいから」ってポンと。

そして、晴ちゃんと約束してんよ。

勉 ……何て。

鈴子 「今日のこと誰にも言わんとって」

「徳山くんからは水買ってるだけなんよ。ホントよ」って、晴ちゃんなんべんも

言って、市バス乗って行ってもた。

勉 なんやねん。

鈴子 なんやねんやろ。

勉 なんやねん。なんやねん。水てあれか。

ミシン台の下やベランダ窓下に並べたペットボトル。

鈴子 あれやろな。

勉 なんやねん。おいしい水や言うてた。晴子。

鈴子 うちも薦められたア。

勉 宇宙のなんちゃらエネルギーを当てたおいしい水やて。

鈴子 病気がなおるやら、植物がよう育つやらやろ。

勉 あの花見て。

ミシン台の隣、蛍袋の鉢植え。

鈴子 うん。きれいやなア。

勉 「おいしい水あげてるから、きれいに咲くんよ」って晴子。

鈴子 あやしい水や。甘いか苦いかなんてわからんやん。水なんて。

勉 おいしかってんけどな意外と。

鈴子 うん。うちも、さっきもろた時おいしかった。おいしい水やて刷り込まれたら、コロリといか
れてまうわ。

勉 あー。あー。あー。なんやねん。なんやねん。俺。

鈴子、抱きしめているバッグから携帯を取り出す。

鈴子 見て見てエ。竜之介。

鈴子、携帯の動画を再生する。

ケラケラ何度も笑い続ける赤ん坊の声。

鈴子 かわいいやろオ。

勉 狂ったように笑てるなあ。

鈴子 ある日、ほったたをこう指でぶるんしたら（自分の頬を人差し指で弾く）竜之介、弾かれたように笑てん。うち、おもうて、ぶるんーてするたび笑てもう、ぶるんぶるんて止まらんかった。

勉 かわいいなあ。

鈴子 やろオ。イマドキ系やろ。障害あるように見えんやろ。

勉 障害あるん。全然見えん。

鈴子 身体のことやから顔見てもわからんよ。普通どおり。

勉 ふうん。

鈴子 晴ちゃん「おいしい水飲めば治るはずや」て言うた。そんなアホな話あるかい。

竜之介、1000グラムの超未熟児で出てきてん。1歳なつても首も座らんかった。竜之介の脳みその電線、首や手や脚や、こう（自分の体に指で縦線を描いて）通ってる電線と、うまいことつながってないんやて。

やからうまいこと動かんかってん。

勉 ふうん。

鈴子 広島にね、魔法つかいの先生がおるん。

勉 ほう、魔法つかいて実在するんか。

鈴子 そ。魔法の手エの整体の先生。

竜之介の顔や手や脚や、体中いろんなとこ突っ付いて押して、信号送るん。

何回も何回も広島通って、吐くほど信号送った。そしたら、動くようになってきてん。ものすごい痛いねんけどな、ちゃんと動くようになるんよ。

鈴子、笑って、勉の左頬を指でぶるんと弾く。

鈴子 笑え。

勉 ……………。

鈴子、笑いながら、勉の右頬を指でぶるんと弾く。

鈴子 笑え。

勉の手や脚や、身体のあちこちを突付いて押して弾く。

鈴子 笑え。

笑え。

笑え。

笑え。

笑え。

笑え。

笑え。

笑え。

勉、突付かれるがままになっている。水道はまだ流れている。

■⑥晴子と勉

その少し後、午後5時30分頃の感覚のイメージ。

抱き合って眠る男と女。

水道はもう止まっている。

ペランダの外、遠くを廃品回収車の、BGMと声が、のろのろと近づいてくるのがわかる。スピーカーの安い音質。その中で、

女だけが先に、もそもそと起き出す。鈴子のように見えたその女は、晴子である。

晴子、床に転がった2つのたこ焼きを見つけて、

晴子 あーあ…。

晴子、床のたこ焼きを拾う。

晴子 汚いなあ…。もう…。

勉、ぼんやりと身体を起こして、そんな晴子の後姿を見ている。

晴子、落ちたたこ焼きを処理して捨てる。網戸を開けベランダへ出て、物干し竿からタオルを取り、じゅうたんのソースの染みを拭く。

ペットボトルの水をタオルに染み込ませ、なおも拭き続ける晴子。

回収車（放送）　こちらは、電化製品の、リサイクル回収車です。ご家庭で不要になりました、テレビ、パソコン、ビデオカメラ、FAX付電話、ダブルラジカセ、ミニコンポ、ギター、アンプ、原付バイク、スクーター、編み機、ミシンなどは、ございませんか。壊れていても、無料で、回収いたしますので、お申し付け下さい。

勉は、音の中でぼんやりと、晴子が懸命に床を拭く姿を、見ている。

■⑦勉と鈴子と蜂

午後5時30分頃。

抱き合って眠る勉と鈴子。

繰り返される廃品回収車の放送が、遠のいて消えるのがわかる。

勉だけが先に、もそもそと起き出す。下はトランクス姿。

網戸を開けベランダへ出て、物干し竿からタオルを取り、その場で顔や首筋を拭く。

勉　あいてッ！

勉、左脚を蜂に刺された。

勉　わわわわわッ！

勉、脚元の蜂をタオルで追い払う。

並べていた空ペットボトルが次々倒れて散らばる。

勉　いってーッ！

鈴子　どしたん？

勉　やられたッ。

鈴子　は！？

勉　蜂に刺されたッ。

鈴子 嘘ッ。

勉 閉めてそこ閉めて。

鈴子 わわわ。

勉 蜂の巣あるねん。クーラーの室外機の中。

鈴子 そんなややこしとこに！？

勉、脛すねを抱えてへたり込む。

鈴子、慌あわてて網戸を閉める。

勉 いってーッ。

鈴子 いややア、もう腫れてきたア。どないしよう。

勉 熱あつっつーッ。

鈴子 針、抜かなあかんのちやう。

勉 脛毛か針かわからん。

鈴子 わかろうよ。あ、おしっこかけたらええって聞くで。

勉 おしっこって誰の。

鈴子 (指差す)

勉 俺の？ どやってかけるん。

鈴子 (来た時飲んだコップを渡す)

勉 コップに汲むんか？ 嫌や嫌や。

勉 あ、おいしい水、あの水付けて。

鈴子 プライド無いんか、勉くん。

勉 今そんな場合か。

鈴子 脚上げて。心臓より上に上げて。

勉 え、無理。(試みる)

鈴子 傷口は心臓より高く。

勉 こう。(手で持って上げる)

鈴子 そうそれ。そのまま。

苦しい勉、座ったまま、右足首を両手で持って支えて上げている。

勉 大丈夫かこれ。

鈴子 大丈夫やるこれで。

勉 大分つらいで。

鈴子 つらいもんやろ。

勉、もう片手で針を抜こうと懸命に皮膚をつまみながら、

勉 ……鈴ちゃん、正直言つて俺、晴子はこの世にもうおらん気がして、たまらん。今。

鈴子 何イ、それ。

勉 人は、死んだら蜂に生まれ変わるねん。

鈴子 なんで蜂？

勉 いつやったか、俺ら夫婦で、晴子の親戚のおばちゃんの葬式行つてん。

「出棺です」言われて、家から棺を出す瞬間、蜜蜂が1匹、入ってきた。

くるくるくるくる部屋を巡って、払っても払っても出て行こうとせん。

晴子、俺の耳元でささやいた。

「あ、おばちゃんや。蜂に生まれ変わった」って。

鈴子 ほな、あの世の晴子がうちに怒って、刺したんやわ。

勉 やっぱり？

鈴子 あーあ。言つたやろ。毒が回るわ。死ぬわ。道連れや。因果応報や。

勉 俺、元々何か悪いことしたかな。

鈴子 知らん。それが悪あくかもしれんよ。

勉 痛い。

鈴子、指に唾をつけて、勉の傷口へなでてすり込む。

鈴子 痛いの痛いのー飛んでいくな。

間。

勉 ……よけ痛い。

鈴子 タオル貸して、濡らしてくる。

鈴子、勉の首にかかっているタオルを取って、洗面所へ行こうとした。その時、玄関がノックされる。

鈴子 ……あ。

林の妻（声） 林ですが、

林の妻、玄関の扉を開ける。

林の妻 すみません、

と、そこに鈴子がいる。

林の妻 え…………。

鈴子と勉、凝固する。

林の妻、手には強盗のあったコンビニの大袋を持っている。

■⑧井上の妻と勉と鈴子

その少し後。5時45分頃。

思い詰めたような林の妻、座卓の脇に、コンビニの大袋を手にして立っている。向かい合って、トランク姿の勉も、立っている。洗面所の傍には、ノースリーブの鈴子もタオルを手にして立っている。

林の妻 ごめんなさい。もうどうしたらいいか混乱しています。謝りに来たのに。私。

勉 ……………。

鈴子 ……………。

林の妻 ねえ井上さん。

勉 はい。

林の妻 共同体の、話はなですけど、

勉 ……はい？

林の妻、座卓の上の食材の3つの山の境をのろろと離しながら、

林の妻 同じ班の者たちは、厳密に、繊細に、きちちりと線引きをして、運命をより分けず。決して間違いのないように、より分けようと心がけます。

けど、こんなふうには、今回みたいに、あつてはならない間違いつて、よう起「つてしまうもの
なんですね。

勉 それ…どついつい意味ですか。

林の妻 井上さんのところに、うちの家の運命が紛れ込んでいたり、うちに、井上さんの運命が転が
り込んでいたり。

勉 え…林さん？ 何の話ですか…。

林の妻 ごめんなさい。これ、うちのなんです。間違えて紛れてたみたい。

林の妻、のろろと、座卓の上の冷凍の山から一つ、食材を取る。

林の妻 私らの班は、一年中、毎週金曜に、配達があるって決まっています。

だから、先週の今日も、運命の日でした。そして、今日も、運命の日です。

林の妻、ぼろぼろと涙を流す。

勉 ……え、林さん、奥さん？

間。

林の妻 ちょうど同じ一週間前なんです。うちの人、いなくなったのも。

間

勉 ……え…。

林の妻 さつき、おたくへお邪魔して、奥さんのミシン台に座って、愕然としました。

たとえば針仕事からフツと顔を上げた角度、上げた視線のちょうどその先に見えるのは、
向かいの棟、304号室、うちの家の窓。

勉 そんな…。

林の妻、304号室の窓を指して、

林の妻 あのカーテン開いてる4畳半。

うちの人、あそこへ一人座って、朝から晩までパソコンの仕事してました。

インターネットで。水を売る仕事。

勉 水……。

林の妻 ええ、水。

勉 おいしい水……。

ふたり、ベランダ窓の下に散らばった水の空きペットボトルに目を落とす。

勉 ここから見ると、あの4畳半のアームライト、夜になったら明かりが灯ってました。

林の妻 うちから見ても、このミシン台のアームライト、夜になったら明かりが灯ってました。

勉 こっちがとぎたま点滅して、

林の妻 こっちもときたま点滅して、

勉 蛍と蛍が発光して求愛するみたいに。

林の妻 その蛍は、どこにつかまえにいったらいいんですかねえ？

勉、挙手する。

勉 ……わかりません。

林の妻 どこであきらめたらいいんですかねえ？

勉 ……わかりません。(挙手)

林の妻も挙手する。

林の妻 ……私もわかりません。

ちよっと、すいません、教えてください。あなた。お姉さん。

鈴子 ……え。

林の妻 井上さんも。

鈴子 ……はい。

林の妻 誰も彼もこんなふうなんですかね。

勉 ……

鈴子 ……

林の妻 何処どこでも彼処かしこでもようあることですかね。

勉 ……

鈴子 ……

林の妻 答えてください。

勉 ……

鈴子 ……

林の妻 否定してください。

勉 ……

鈴子 ……

林の妻 人間は、黙り合うものなのですか？

人間は、騙し合うものなのですか？

勉 ……

鈴子 ……

林の妻 寂しいからですか？ こうなってしまうのは。

勉 ……

鈴子 ……

林の妻 私、寂しい。

林の妻、座って、コンビニ二袋を取る。

林の妻 そや、忘れてた。

コンビニ二袋からのろのろと中身を出して、座卓の上に置く。

林の妻 パン、どうぞ。食べてください。

勉 パン、なんでこんなにたくさん。

林の妻 私、パートに出てるんです。171号線のコンビニで。午前中だけ。

鈴子 ……

勉 ……

凍りつく鈴子。

林の妻 廃棄の分なんで気い使わないでくださいね。ホンマは規則であかんですけど、内緒でもらうんです。

林の妻、パンを几帳面に積み上げている。

林の妻 どうぞ。お一人やったら困りはるでしょう。料理とか。

勉 食べきれないんで、僕、そんなに。

林の妻 冷凍しといたら持ちますよ。お姉さんも、ねえ、もし良かったら。

鈴子 ……

林の妻 お姉さん。

鈴子 ……はい。

林の妻 どうぞ。

林の妻、コンビニの袋をのろのろと几帳面に畳みながら、鈴子に、

林の妻 団地の方かたでしたっけ？

鈴子 いえ。

林の妻 どこかで会おうたことありましたっけ。

鈴子 いえ。

林の妻、さっきの間違った食材を手にとって、

林の妻 エビシューマイ、溶けてしもてる。

息子のお弁当にしようと思っただのに。

まあ、今日の晩ごはんはんにチンして出したらいいわよねえ。ねえ。

帰りかけた林の妻、鈴子に聞いた。

その時、団地に響く、「夕焼けこやけ」のサイレンの音楽。

鈴子 ……あ、6時や。

林の妻 井上さん、あれ早はよ、冷凍庫に、入れとかないと全部溶けてしまっ。

■⑨ 勉と鈴子

そのほんの少し後、午後6時。

サイレンの音楽が二巡ふためぐりして終わりそうな頃、鈴子、勉にキスをして、追いたてられるように、濡れたジャケットを着て、カゴバッグを手にする。

勉　なんでそんなんするん。

鈴子　一つ秘密を作ったから、一つ秘密を守ってよ。

勉　さっき破ったとこやし。守れへん。

鈴子　うち逃げる。逃げるウ。逃げていい？　いいよねエ、勉くん。

勉　わからん。俺に言われても。

鈴子　どこ行こうかなア。隠れんぼの遊びは、

とりあえず陣地の外へ出なあかんよなア。どこがええ思う？　勉くん。

勉　逃げるて、広島へは行かへんいうことか。

鈴子　行ったらよけ突き当たりやもんなア。

勉　魔法つかいのとこ行くんやろ。広島市中区舟入本町の魔法の国へ行くんやろ。王子が待ってますよ。

鈴子　生憎もう馬車が間に合いません。最終の鈍行乗って行こう思ってたん。こつからやと武庫之荘から阪急乗って三宮まで出て、JRで三ノ宮18時22分発、広島23時17分着。今18時来たし絶望やん。

勉　余裕やん。間に合うよ。明日でも明後日でも行けばええやん。

鈴子　まさに今をどうしよかいう話よ。

勉　ほな新幹線や。ビール飲んでピャーや。

鈴子　えらい豪勢やなア。

勉　貝柱食って寝てたらしまいやで。

鈴子　グリーン車乗ってみたいなア。乗ったことある？　勉くん。

勉　ない。ディスカウントチケットのビジネスきつぷ。自由席専門ですわ。

鈴子　乗ってみたいなア。グリーン車。

勉　乗りゃいいやん。バーンといてこましたれ。

鈴子　うん。(少し笑って)

鈴子、子供にするみたいに、勉にズボンをはかせようとする。

鈴子　はい、脚上げて。ズボンはいて。

勉　鈴ちゃんの子供やないんやで。

鈴子　行くで。グズグズ言うてんと早はよしィ。(ズボンをはかせながら)
勉　え？　なんで俺が行くねん。

鈴子　一緒に行こう。手エ繋いで逃げよ。敗者復活戦よ。グリーン車乗って、

窓から山を仰ぎ見て、すぐろくや。2コマ進んで一回休み。^{ふた}

勉、ズボンを自分で履き、

勉 行かれへんで。俺。負傷兵やから。ここにおるわ。

脚、蜂に刺されたし、じき熱がでる。

鈴子 ほなうちが勉くん背たろうて、おんぶしていったる。よし来いッ。

鈴子、子供にするみたいに、背中を差し出す。

勉 行かへんで。

鈴子 行こ。6時のあの、夕焼けこやけのスピーカーも言うてる。団地中響いて、お手でつないでみな帰ろて。

勉 やろ。やから俺は、ここで、晴子を待つかかな。

鈴子 ……あ。

鈴子の動きが止まる。立ち尽くす。

鈴子 ……待つ…。

勉 もしもどこぞで晴子が身動きとれずにおったら、俺が晴子背負って、おんぶして帰ったらな。

間。

鈴子 そっかア。やっぱりかア。

勉 そやで。何言ってるん。

鈴子 負けたア…。

勉 これから勝ちにいくんちゃうん。鈴ちゃんは広島で復活戦。ドンパチや。

魔法使まじてイチコロやる。

鈴子 卑怯やわア。勉くん。

勉 行っといで。鈴ちゃん。

勉、穏やかに座卓につく。

鈴子 1つ、お土産ちょうだい。

勉 何。

鈴子 あれ。あのちっこい赤い服。

勉 ええけど、犬の服やで。

鈴子 ええの。竜之介がもうじき歩きだしたらね、犬飼うて、一緒に散歩行くねん。

勉 そか。ほな、贈呈致します。

式典みたいに。

鈴子 頂戴致します。

勉、調子の外れたような歌。

勉 ♪蛍の光窓の雪♪

鈴子 何イそれ。

勉 はなむけの歌やろ。

♪ふみよむ月日重ねつつ いつしかとしもすぎの戸を
明けてぞけさは別れゆく♪

勉、犬の服を鈴子に贈呈する。

鈴子 うん。ほな。行く。

勉 うん。

鈴子が行きかけた時、

勉 あ、鈴ちゃんちよっと待ちい。

勉、鈴子に背を向け、たんすの引き出しの奥の、あの包みから、封筒を出し、中身の札を

抜く。ティッシュを何枚か取り、札をくるむ。

そして、鈴子の夏ジャケットのポケットに入れる。

勉 これないないしとき。帰りの汽車でお菓子買い。

鈴子 いややわア。

鈴子、ケラケラ笑う。

勉 田舎帰ったときの帰り際、そやってばあちゃんが必ず言うと思った。

「勉くん、ちょっと待ちい」て。

鈴子 そうそう、なんか知らんけど、ばあちゃんって、絶対ティッシュやねんなあ。

勉 うちのばあちゃん、俺が晚一緒に寝てあげたら、そやって1000円、お駄賃くれたた。

鈴子 高いお菓子代やア。うわア——！。

■
⑩ 勉

日暮。

勉が一人で部屋にいる。

ミシン台のアームライトを灯してみる。暫く。点滅させてみる。

そして勉、座卓の上の食材を入れようと生協の箱を開ける。

とそこに、先週晴子の言っていたそうめんが入っている。

そうめんを出す。

すると、チラシのメモがもう一枚出てくる。晴子の字でレシピが書かれてある。

勉 そうめんの作り方。

- ① 大きめの鍋にお湯をたっぷり沸す。
- ② 青ねぎを切る。
- ③ 新しょうがをおろす。
- ④ 沸騰したお湯に、そうめんを入れてゆでる。
- ⑤ 吹きこぼれそうになったら、コップに水を半分。ビックリ水を差す。
- ⑥ もう一度沸騰したら火を止める。
- ⑦ ザルに入れて冷たい流水で冷やす。
- ⑧ できあがり。

勉、晴子のメモしたレシピをボソボソと読み上げている。

※この戯曲の上演を希望される場合は、作者・角ひろみまでご連絡ください。

hiromi1185@yahoo.co.jp